

## 『当代記』の地震記事の記録拠点—慶長九年の場合

神戸大学名誉教授 石橋 克彦\*

Observation Point of Earthquake Records in *Todai-ki*: In Case of the 9th Year of Keicho (mostly 1604)

Katsuhiko ISHIBASHI

Emeritus Professor, Kobe University

*Todai-ki* is a useful historical earthquake document in Japan for the period from the late 16th to the early 17th centuries, when contemporary records are scarce. However, it is a compiled document, and its compiler and the date of completion are unknown. The felt point of its earthquake records has neither been identified yet. For example, concerning its description of the 1605 Keicho great tsunami earthquake there is a debate whether the felt point which *Todai-ki* mentions is Kyoto or not. In this study, as the first trial to investigate the “observation point” of *Todai-ki*'s records on natural phenomena such as weathers, earthquakes, volcanic eruptions, and so on, I compared all the weather records in *Todai-ki* with those in seven diaries written in Kyoto for the 9th year of Keicho when the 1605 Keicho great tsunami occurred. As a result, the weather records in *Todai-ki* are considered to have been made at a little distant place from Kyoto. Based on the records in *Todai-ki* in the snow season, I infer that the observation was made in a bit more snowy place than Kyoto, e.g., the present Aichi Prefecture area.

Keywords: *Todai-ki*, Historical Earthquake Document, Diaries, Keicho Earthquake and Tsunami.

### § 1. はじめに

織豊期から慶長二十年(七月十三日に元和に改元;概ね1615年)正月までの編年的記録として、『当代記』(以下、本書)という史書がある。§ 2でみるように編著者・成立年は不明だが、とくに慶長年間の政治・社会・自然現象などに関しては生々しい独自の記事も多く、重要な準同時代史料と考えられている。『大日本史料』[東京大学史料編纂所(2011)参照]も引用書目に加えている。

慶長十二年正月(1607年2月)までを収録期間とする「[古代・中世]地震・噴火史料データベース(β版)」[古代中世地震史料研究会(2017)]は、本書から、1573～1607年の地震・火山噴火・その他の事象について合計21件の記録を収録している。その後の期間に関しては、『増訂大日本地震史料・第一巻』[武者(1941)]が15事象の記録を掲載している。このように本書は、徳川幕藩体制が安定化する以前で同時代史料が少ない時期における地震・噴火史料としても、貴重である。

しかし、編著者不詳に関係して、個々の自然現象の記事がどこで「観測」された状況を述べているのか不明であるのが大きな問題である。例えば、慶長九年十二月十六日(1605年2月3日)の房総半島以西の大津波について本書は、「十六日戌刻、丑寅之方に魂

打くたまうち三度、同地震」で始まる記事を書いているが、宇佐美・他(2013)が「京都で有感を示すものは『当代記』のみ」としているのに対して、石橋(2014, 2019)はこの記述は京都の状況ではないだろうと述べている。これがどの地点のことかは、慶長九年地震津波を解明するうえで非常に重要である。

石橋(2014, 2019)の上記の判断は、問題の記事の近くの天気の記事を京都の当時の日記と較べてなされたのだが、その具体的な検討内容は示されていない。そこで本稿では、あらためて慶長九年全体について本書の天気記事のすべてを京都の日記の記事と比較して、本書がどこで書かれたのかという問題へのアプローチを試みたい。

一般に、史書の自然現象の記事を文理横断的に検討する作業がその史書の性格をより明らかにすることに役立つ場合があると考えられる。本書に関しても、慶長年間全部について吟味することが有益ではないかと思われるが、本稿はその第一歩である。

### § 2. 『当代記』の概要

本書は、国立公文書館内閣文庫に九巻九冊本、十巻十冊本、十巻五冊本が所蔵されているほか、各地に写本が存在する[伊東(1969), 国文学研究資料館(2020)]. 翻刻は『史籍雑纂 第二』に収録されて

\* 神戸市在住

電子メール: ishi@kobe-u.ac.jp

おり[國書刊行會(1911)], 本稿で引用する記事はこの翻刻本による。

内容は、始めに天文・弘治・永禄年間(1532~69)の略述があり、元亀年間(1570~72)頃から年月日順の体裁が整ってくる。織豊期の記事は小瀬甫庵<おせほあん>の『信長記<しんちょうき>』『太閤記』を資料としているものが多いという[伊東(1969)]。慶長年間(1596~)になると日を追って記す日記風の形式が強まり、徳川家康や諸大名の動向、世相、天気・災害などの記述の精彩が増す。

編著者については、『史籍雑纂 第二』の緒言は「本書の記者は、伊勢亀山城主松平忠明なりとの説あれども、詳ならず」と記し、高木(1989)も「家康の外孫で姫路城主松平忠明との説があるが根拠はない」としている。そして「おそらく、江戸幕府当局者から情報を入手できる立場の者が、手もとの資料や手びかえを整理して、後年に執筆したものと考えられる」と述べている。

いっぽう伊東(1969)は、内閣文庫の九巻九冊本が筆跡や体裁からみて草稿本であろうとして、数人の者が諸書を参照したり聞き取りをしたりして編纂したのではないかと、編纂者が一人だったとしても数人の助手を使っただろうと推測している。そして、編者は京都あたりに住んだ牢人学者か医家などではないかとしている。成立時期に関しては、伊東(1969)が、甫庵本が刊行されたのちで、徳川秀忠が大御所の時代か死後あまり年数がたたない頃、おおよそ寛永時代(1624-43)の編纂だろうと述べている。

田中・小山(2000)は本書の自然現象に関する記事を分析し、地域不特定記事が非常に多いことと、言及地名のなかに伊勢国北部と伊賀国がないことを見出し、「筆者」(田中・小山は一人の人間が書いたと考えている)は身近な地域の現象を書くときには地名を記さないだろうから、「筆者」の居住地は伊勢国北部の内陸か伊賀国と考えるのが自然だと結論した。これはユニークな分析手法と結論で、興味深いだが、残念ながら論述が簡略で、論理もやや機械的であり、説得力は十分ではない。また武者(1941)は、本書の地名のない地震記事に対して「駿河国府中、地震フ」という綱文を立て、本書が駿府(現静岡市)で書かれたと考えているようだが、その根拠は不明である。

松岡(2019)は、本書は編纂史料であるとして、文禄五年浅間山噴火(1596)と慶長九年地震津波(1605)の記事について、記述の特徴や典拠となった文献を検討した。その結果、本書は典拠をそのまま

書き写したのだろうと推定し、編纂者の主観の入らないものだと考えた(だから信用できるということか)。

なお太向(2011)が、史籍雑纂本の巻一・二に記されている「時間的文言」を分析して、本書の成立事情を考察している。

### § 3. 慶長九年の天気記事の検討

本書のなかで、江戸や畿内をはじめ全国的な「歴史的事件」などに関する記事は、編纂時に諸書から採録したものが多いのだろう。しかし本書には、日付に掛けた天気や非常にローカルと思われる出来事もかなり記されている。それらは、編者に個人的に結びついた日記のようなもの(「典拠日記」と仮称する)があつて、そこから抜粋された可能性を感じさせる。そういった日常的な些細な記事を検討することも、本書の成り立ちを考える参考になると思われる。

そこで本節では、慶長九年の1年間(史籍雑纂本の巻三のうち)について、本書の天気記事を京都付近で記された日記と比較し、「典拠日記」の存在を推測することが妥当かどうか、妥当だとしたらそれがどこで書かれたか、を考える手掛かりとしたい。本書が日記風の体裁だといっても1年間の日数は少なく、しかも天気が書かれていない日付も多いから、検討対象となる天気記事は3.2で扱うものがすべてである。

#### 3.1 比較した京都の日記

この時期は幸いなことに、京都および近郊で書かれた日記が複数存在する。以下の7点を用いた。

**A 義演准后<ぎえんじゅごう>日記:** 醍醐寺(京都市伏見区醍醐東大路町)の座主<ぎす>(大寺の長)で東寺長者を務めた義演(1558-1626)の日記。記事は弥永・副島(1985)から採った。

**B 言経<ときつね>卿記:** 医薬も業とした権中納言・山科言経(1543-1611)の日記。自筆原本35冊が東京大学史料編纂所に架蔵されている。言経は慶長九年には現在の京都御所の北に住んでいた。記事は東京大学史料編纂所(1983, 1987)から採った。

**C 御湯殿上<おゆどのうえの>日記:** 内裏(皇居)内の御湯殿上の間<ま>で天皇近侍の女官らが書き継いだ職掌日記。応永七年(1400)から江戸時代末までが伝存する。慶長九年の内裏の位置はすでに現在の京都御所である。記事は埴・太田(1958)から採った。

**D 慶長日件録:** 大学寮の教官である明経博士<みょうぎょうはかせ>舟橋秀賢<ふなはしひでかた>(1575-1614)の日記。記事は山本(1981)から採った。

表1 『当代記』の慶長九年のすべての天気記事と京都の同時代史料(日記)の天気記事との比較

Table 1. Comparison of all the weather records in *Todai-ki* with those in dairies written in Kyoto for the 9th year of Keicho.

史料 月日	正月朔日 (1604.1.31)	七月五日 (1604.7.31)	七月廿五日 (1604.8.20)	八月四日 (1604.8.28)
当代記	曇、夜半以後大雪、元日より八日九日まで寒、其後暖氣、	此日夕立甚、佐和山普請場へ雷落、随分之者伊勢衆三人、其外十人死、五三十も手負在、之由也、	甲戌、戌刻夕立甚、近年如、此急雨無、之、夥雨也、	壬午、酉の時より大風、誰そ時迄は雨少降時も在、之、戌刻より雨不降、風計也、諸國失毛不可勝計、
A 義演准后日記	一日、天快晴／ 二日、天霽	五日<天気不記>／ 六日、大夕立	廿五日<記事なし>／ 廿六日<天気不記>／ 廿七日、大夕立	四日、雨／ 五日、雨
B 言経卿記	一日、晴陰／ 二日、早曉雪、晴陰	五日、天晴／ 六日、天晴、大夕立、雷三所落云々	廿五日、天晴／ 廿六日<日付・天気なし>	四日、雨／ 五日、雨
C 御湯殿上日記	一日、はるゝ／ 二日、雪ふる	五日<天気不記>／ 六日、夕たち、かみなる<ママ>	廿五日、はるゝ、よるふる／ 廿六日、雨ふる／ 廿七日、はるゝ、ふる、かみなる<ママ>	四日、ふる／ 五日、ふる
D 慶長日件録	一日／ 二日<天気不記>	五日、晴／ 六日、晴、<中略>未刻夕立如車軸、入夜晴	廿五日、晴、<中略>及黄昏夕立／ 廿六日、晴、<中略>及晩雨降／ 廿七日、晴、<中略>及晩大雨降、幾度降	四日、雨降／ 五日、雨降、
E 時慶記	一日、天晴／ 二日、暁天ヨリ雪大降、午晴	五日、天晴、暑甚、雷鳴して不降／ 六日、天晴、暑甚、未下刻ニ大雷、大雨降大地湿	廿五日、天晴、暑同、<中略>及夜忽ニ雷鳴雷して雨降／ 廿六日、天未晴、<中略>大ニ夕立雷鳴候／ 廿七日、天晴、午後夕立雷鳴及夜	四日、雨止、晩大風／ 五日、雨天
F 舜旧記	一日、天晴／ 二日、雪降	五日、天晴／ 六日、天晴、晩夕立、雷鳴	廿五日<記事なし>／ 廿六日、天晴／ 廿七日<記事なし>	四日、曇、<中略>及暮雨降／ 五日<記事なし>
G 鹿苑日録	元日、自朝陰、雖然雨不降／ 二日、自朝深雪、<中略>雪之積已六七寸、及辰尾未晴、不知後刻、自午時雪晴	五日、自朝晴天／ 六日、自朝晴天、及申尾乍雨、及酉頭快晴、且蘇草木者、不堪欣然	廿五、自朝晴天／ 廿六、自朝晴天	四日、自朝陰、時々吹雨、疾風不斜、只恐作大風乎、雖然頃刻止／ 五日、自朝陰、風吹面寒

注：記事の多寡にかかわらず天気記事のみを記す。干支も省略した。複数日の記事を記す場合、日付の区切りを「/」で示す。「して」の略字を表記できないので平仮名で書いた。< > 内は本論文著者(石橋)の注記である。

<to be continued>

<continued>

月日 史料	十一月十八日 (1605.1.7)	十一月廿日 (1605.1.9)	十一月廿九日 (1605.1.18)	十二月十一日 (1605.1.29)
当代記	寒に入、翌朝少雪ふる、	廿日夜廿一朝迄大雪、	晩より大雨、	夜より日々十六日迄雪ふる、但積事はさしてなし、
A 義演准后日記	十八日<天気不記>/十九日<記事なし>	廿日/廿一日<天気不記>	廿九日<天気不記>/十二月朔日、晴	十一日/十二日/十四日<記事なし>/十三日/十五日/十六日<天気不記>
B 言経卿記	十八日、晴、小寒入/十九日、天晴	廿日<天気不記>/廿一日、天晴	廿九日、晴/十二月一日、晴陰	十一日、雪、天晴/十二日、天晴/十三日、天晴/十四日、天晴/十五日、天晴/十六日、晴、晩雪
C 御湯殿上日記	十八日、はる>/十九日、はる>	廿日、はる>、ゆきふる/廿一日、はる>	廿九日、はる>/十二月一日、はる>	十一日、はる>/十二日、はる>/十三日、はる>/十四日、はる>/十五日、はる>/十六日、はる>
D 慶長日件録	十八日、晴/十九日、晴	廿日、晴/廿一日、晴	廿九日、晴/十二月朔<天気不記>	十一日、晴/十二日、晴/十三日、晴/十四日、晴/十五日、晴/十六日、晴
E 時慶記	十八日、天晴、小寒二入/十九日、天晴	廿日、天晴/廿一日、天晴、時々雪散	廿九日、天雨/十二月一日、暁天風雨、午晴	十一日、天晴陰、暁ハ雪少散/十二日、天晴/十三日、天晴、暁ハ雪少散、明テ風烈/十四日、天晴寒/十五日、天晴、寒風如昨/十六日、天晴
F 舜旧記	十八日<天気不記>/十九日<記事なし>	廿日/廿一日<記事なし>	廿九日<天気不記>/十二月一日、天晴	十一/十三/十六日<天気不記>/十二日、天晴/十四日<記事なし>/十五日、天晴、
G 鹿苑日録	十八、自朝晴天/十九、自朝晴天	廿日、自朝晴天/廿一日、自朝晴天、<中略>予者雪降故及申尾歸院	廿九、自朝晴天、豊光御下向後連日晴天、不堪欣然/十二月朔、自朝晴天	十一、自朝晴天、雪少降/十二、自朝晴天/十三、自朝晴天/十四、自朝晴天/十五、自朝晴天/十六日、自朝晴天

注：記事の多寡にかかわらず天気記事のみを記す。干支も省略した。複数日の記事を記す場合、日付の区切りを「/」で示す。<>内は本論文著者(石橋)の注記である。

**E 時慶<ときよし>記**：参議西洞院<にしのとういん>時慶(1552-1639)の日記。記事は時慶記研究会(2008)から採った。

**F 舜旧記<しゅんきゅうき>**：神道家で豊国<とよくに>神社(京都市東山区大和大路正面茶屋町)の神宮寺別当だった神竜院<しんりゅういん>梵舜<ぼんしゅん>(1553-1632)の日記。別名『梵舜日記』。記事は鎌田(1973)から採った。

**G 鹿苑<ろくおん>日録**：相国寺<しょうこくじ>(京都市上京区今出川通烏丸東入ル)の塔頭<たっちゅう>・鹿苑院(現在は廃絶)の歴代院主の日記。慶長九年

時の記主は鶴峯宗松(1565-?)である。記事は辻(1935)から採った。

なお、この時代の重要な日記である『小槻孝亮宿禰記<おづきたかすけすくねき>』は慶長九年分が伝存していない。

### 3.2 比較した天気記事

記事の比較をまとめたのが表1である。表の書き方については表下部の注記を参照されたい。以下に日付順にみていくが、京都付近の7点の日記の記述は同じ日に関してすべて一致しているわけではない。こ

これは場所の違いや記憶違いなどによるのだろう。各日について比較検討したうえで、最終的には比較の全体的傾向をみるのが重要だと思われる。

**1. 正月朔日：**本書は「曇、夜半以後大雪」と記す。

京都では、Gの「元日、自朝陰、雖然雨不降／二日、自朝深雪、＜中略＞雪之積已六七寸」がこれに近い。Eの「一日、天晴／二日、暁天ヨリ雪大降、午晴」もかなり近い。Bの「一日、晴陰／二日、早暁雪、晴陰」、Cの「一日、はるゝ／二日、雪ふる」、Fの「一日、天晴／二日、雪降」も著しく違うとはいえない。

すなわち、この日の天気記事に関しては、本書が京都と明らかに異なるとはいえない。なお、本書が記す「元日より八日九日まで寒、其後暖氣」については、各日記は寒暖まではほとんど記していない。

**2. 七月五日：**本書は「七月五日、＜中略＞此日夕立甚、佐和山普請場へ雷落、随分之者伊勢衆三人、其外十人死、五三十も手負在之由也」と記す。佐和山普請場(佐和山城[彦根城の東方約1.6km]を彦根城に移す工事が七月一日から始まっていた)の落雷事故は伝聞だが、「此日夕立甚」はほかの天気記事と同列ではないかと思われる。

これに対して京都の五日は、Eが「天晴、暑甚、雷鳴して不降」と記すほかは、どの日記も「晴」だけで夕立があった様子はない。いっぽう、翌日の六日に大夕立があったことを7つの日記すべてが記している。日記によって未刻(13～15時)、未下刻(15時頃)、晩、申尾(17時頃)で、落雷もあったようである。なおGの「乍雨<さう>」は俄雨のことである。

本書が日付を誤記したのではないかと疑うことも可能だが、本報では、本書の記す夕立・雷は実際に京都の1日前だったと考える。『大日本史料 第十二編之二』[東京帝國大學文科大學史料編纂掛(1901)]も、七月五日に「近江大雷雨、明日山城大雷雨」という条を設けて本書・B・D・Eを引いている。

**3. 七月廿五日：**本書は「同(=七月)廿五日甲戌、戌刻夕立甚、近年如之此急雨無之、夥雨也」と記す。七月二十五日の干支「甲戌」は正しい。この少し前にも「同廿五夜、俄大雨」という記述がある。

これに対して京都では、Cが「廿五日、はるゝ、よるふる」、Dが「廿五日、晴、＜中略＞及黄昏夕立」、Eが「廿五日、天晴、＜中略＞及夜忽ニ雷鳴雷して雨降」と記すが、B・Gは「晴」だけで、大夕立ではなかったように思える。A・C・D・Eの記述からは、京都では廿六日と廿七日のほうが大夕立だったようである。

前項と同様に、本書が記す「夕立甚」は京都とは1

日違っていると判断される。干支日から廿六日の誤記とはいえない。

**4. 八月四日：**本書は、この日酉時(17～19時)から大風で、誰そ時(夕暮れどき)までは雨が少し降るときもあったが戌刻(19～21時)からは雨は降らずに風ばかりだったと記す。諸国の失毛(損毛、農作物の損失)は数えきれないほどだったという(これは後日の伝聞だろう)。

京都でも、Eによれば、(三日が雨天だったが)四日には雨が止んで晩に大風だった。Gも、四日は朝から曇で時々吹き降りだったが、疾風がひととおりではなかったと記す(暫くして止んだ)。しかしA～Dは雨だけを記し、ひどい大風や荒天だったようには思えない。やや微妙だが、本書が記す天気と京都の天気は若干異なっていたように思われる。

**5. 十一月十八日：**本書は「寒に入、翌朝少雪ふる」と記す。BとEも「小寒(二)入」と記している。しかし、いずれの日記でも翌朝雪が降った様子はない。

**6. 十一月廿日：**本書は「廿日夜廿一朝迄大雪」と記す。いっぽう、Cが「廿日、はるゝ、ゆきふる」、Eが「廿一日、天晴、時々雪散」、Gが「廿一、自朝晴天、＜中略＞予者雪降故及申尾歸院」と記す。しかしGの記主は、廿一日には朝外出して申尾(17時頃)に帰院するまで相国寺の塔頭を巡るなどしている。これらのことから京都では、両日に雪が散らつくなどしたが「廿日夜から廿一朝まで大雪」という状況ではなかったと推測される。

**7. 十一月廿九日：**本書は「晩より大雨」と記す。これに対してEのみが「廿九日、天雨／十二月一日、暁天風雨、午晴」と記すが、ほかの日記も総合すると、京都は「晩より大雨」という状況とは違ったようである。

**8. 十二月十一日：**本書は「十二月十一日夜より日々十六日迄雪ふる、但積事はさしてなし」と記す。これに対して京都では、Bが「十一日、雪、天晴／十六日、晴、晩雪」、Eが「十一日、天晴陰、暁ハ雪少散／十三日、天晴、暁ハ雪少散」、Gが「十一、自朝晴天、雪少降」と記すが、それ以外は連日「晴」である。よって、十二月十一日から十六日までの本書の天気記事は京都とは異なる判断される。

## §4. 考察

### 4.1 「典拠日記」の存在

前節の検討からまず言えることは、全体の傾向として、本書の天気の記事は京都の天気と異なっている

が、わりあい似ていて、後年の編纂書としては正確で、かつ同一場所の天気だと思われることである。よって、少なくとも慶長九年に関しては、比較を始める前に推測した「典拠日記」のようなものが実際に存在し、編者はその天気記事を抜き書きした可能性が高いと考えられる。

「典拠日記」の記主が本書の編者であるかどうかはわからないが、天気記事以外のローカルな事項も「典拠日記」の記主の実体験や実見聞が多いのではないかと推測される。「典拠日記」の書かれた場所を「記録拠点」と仮称しよう。

#### 4.2 「記録拠点」について

前節の検討により、正月朔日については見分けがつかなかったが、七月五日、廿五日、十一月十八日、廿日、廿九日、十二月十一～十六日に関しては、本書に書かれた天気は京都とは異なると判断された。八月四日も微妙だが、やや違うようである。したがって、「記録拠点」は京都ではないと結論できる。

では「記録拠点」はどこかというのが次の重要な問題だが、降雨や降雪の日が1日ずれているとか強弱が違うという程度なので、京都から大きく離れた場所（例えば江戸とか駿府とか）ではないと考えてよいだろう。具体的な地点を推定することは本稿の段階では困難だが、以下で一つの可能性を推測してみたい（現段階では、あくまでも想像の域を出ないが）。

十一月十八日、廿日、十二月十一～十六日に京都よりも降雪が多かったとみられるところから、京都から遠くないが京都よりも雪の降りやすい地域として、関ヶ原付近から雪雲が流れ込んで降雪が起きやすい美濃西南部・伊勢東部・尾張・三河北西部あたり[例えば、木村(2010)]が一つの候補地になるのではなかろうか。本書に「(慶長九年)八月十四日壬辰、八月節也、伊勢尾州近江美濃者大風、山城大和畿内此風不<sub>レ</sub>吹、三川もさして不<sub>レ</sub>吹、尾州長島高波にて、堤崩水入」という記事があり、基本的には伝聞情報だろうが、「三川もさして吹かず」という部分が、「典拠日記」が自分の地域に言及したようにもみえる。「尾州長島高波」も身近な見聞なのかもしれない。

#### 4.3 三河の記事

本書の慶長八年と九年には次のように三河国鳳来寺(現新城<しんしろ>市の旧鳳来町)の記事がある:「(慶長八年正月)廿七日鳳来寺護摩堂炎上、又天狗倒し有て、二王堂の角を撃碎、惣別彼山ある」と

云々、此年中に、衆徒數多病死也」、「同(慶長九年七月)廿二三日比、三州鳳来寺山移動揺、衆徒彼山滅亡歟之由を存、本堂へ打寄居す」。2件とも「大日本史料総合データベース」[東京大学史料編纂所(2011)]に出ているが、引用は本書だけである。

また、慶長八年に「去五月五日午刻、雪雹<ひょう>、三川之山中降、中にも名蔵山山多降、木の葉悉打落す、くちなわ多死之由也」という記事があり、本書だけが東京大学史料編纂所(2011)に引かれている。「名蔵」とは、慶長前期に名蔵氏(奥平信光)が活動していた旧名倉<なぐら>村(現愛知県北設楽郡設楽町<くしたらちょう>)だと考えられる[名倉村・沢田(1951)]。

以上の出来事も「典拠日記」に書かれていたのかもしれない。情報入手には記主の階層や立場も重要な要因だが、「記録拠点」が鳳来寺や名蔵の情報の入りやすい場所だったとも考えられる。すなわち、想像の域を出ないが、三河国の中に「記録拠点」があった可能性もあるのではなかろうか。

十二月十六日の大津波に関する本書の記述「戊刻、丑寅之方に魂打三度、同地震」も、「典拠日記」から書き写したのではないだろうか。そうだとすれば、東海地方で何らかの音響が聞こえて(「魂打」については付記を参照)、その後揺れを感じた可能性がある。少なくとも、この記述が京都のことである可能性は非常に低いといえよう。

#### 4.4 編著者についてのコメント

本書の編著者に関しては、政治的・社会的記事を分析しなければならぬから本稿では立ち入らないが、「記録拠点」の検討のなかで気が付いたことを述べておく。それは、記者という説が疑問視されている松平忠明<ただあきら>(1583-1644)(§2)が、本書の成立に関係あるかもしれないことである。

松平忠明は、奥平信昌と亀姫(徳川家康の長女)の四男として三河国新城に生まれ、家康の養子となって松平姓を名乗り、慶長七年(1602)から8年間は作手<つくで>(現新城市内)の藩主として善政を敷き、同十五年に伊勢の亀山城主(作手郷も続けて領有)、寛永十六年(1639)に姫路城主となり、同地で没した(経歴一部省略)[齋木・他(1974)、作手村誌編纂委員会(1982)]。慶長八年には名倉の検地もしたという[名倉村・沢田(1951)]。

このように松平忠明は三河が基盤であり、後年まで三河地方の人脈は身分を問わず広く深かったと推測される。本書の慶長七年九月の条に「松平下総守、

美作守信昌息，三州作手拝領，是は奥平代々弓立所に付て如<sub>レ</sub>此」とあるから，本書の編著者が忠明本人とは考えにくい，少なくとも「典拠日記」の記主が忠明の故地ないし支配下の人物だった可能性があるかもしれない。

## § 5. おわりに

織豊期から徳川幕府創始期までの編年的記録で，この時代の地震・噴火史料としても貴重な『当代記』について，慶長九年の1年分だけだが，そのすべての天気記事を京都で書かれた7点の日記と比較して，本書の天気記事の「記録拠点」がどこかを検討した。比較をとおして天気記事が正確であることが窺われ，本書の編者が参照した「典拠日記」というべきものがあつたらうと推測された。

本書の天気記事は京都の天気と似ているが同じではなく，「典拠日記」の「記録拠点」は京都に比較的近いが京都ではない場所だと推定された。降雪期の天気記事から，一つの可能性として，関ヶ原付近から雪雲が流れ込んで雪の降りやすい美濃南西部・伊勢東部・尾張・三河北西部あたりが想像される。さらに，本書だけが記している三河国鳳来寺山や名蔵の記事があり，そういうローカル情報が得やすい場所—単純には三河国内—が「記録拠点」だったのかもしれない（場所だけではなく記主の立場も重要だろう）。

慶長九年地震津波に関して本書が「丑寅之方に魂打三度，同地震」と記しているのは，「典拠日記」の記主（本書の編者と同一かどうかはわからない）が「記録拠点」で実体験した現象の可能性もある。少なくとも京都ではないだろう。

今後は，以上の仮説の批判的検討とともに，慶長二十年まで同じ「典拠日記」が参照された可能性があるかどうかと，「記録拠点」が動いていないかどうかについても，調べる必要がある。

### 付記：「魂打」という語句について

本稿の主題ではないが，本文中で引用した『当代記』の「同十六日戌刻，丑寅之方に魂打三度，同地震」の「魂打」について補足しておく。

「[古代・中世]地震・噴火史料データベース(β版)」「[古代中世地震史料研究会(2017)]」には，上記のほかにも，以下の2件の「魂打」がある。

#### 1. 文治四年五月一日(1188年5月28日)

〔吾妻鏡〕 一日丙申，酉尅，乾方成響，是若魂打歟，非雷聲，恒聞不及云々。

#### 2. 慶長九年二月十日(1604年3月10日)

〔当代記〕 二月十日之夜丑刻ニ，魂打歟とんとんと五六度鳴，其後はたはたと云事夥し

「魂打」の意味について各種の辞書を見ると，『大漢和辞典』(修訂版10刷，大修館書店，1990)は「驚かせて肝をつぶさせる一種のものけ」(上記『吾妻鏡』を例文に掲げる)，『日本国語大辞典』(第二版，小学館，2001)は「驚いて肝をつぶすこと」(同じく『吾妻鏡』を例文に掲げる)，『広辞苑』(第七版，岩波書店，2018)も「驚いて肝をつぶすこと」としている。

『吾妻鏡』の文章については，五味・本郷(2008)が「酉の刻に北西の方角から大音響がした。これはもしかすると魂打であろうか。(下略)」と訳し，巻末注で「魂打 未詳。人魂の鳴らす響き。呪詛の一種か」と述べている。

『日本国語大辞典』と『広辞苑』の語釈は『大漢和辞典』の語釈の一部分だけをとったように思えるが，いまみている3件の「魂打」に対しては意味が通じない。「ものけ」であれば，それが発する音ということで意味はとれる。五味・本郷(2008)の「大音響」は，筆者は疑問を感じる。虚空に不気味に響く，どちらかといえば「陰に籠もった」音ではないかと感じられる。「魂打」の意味と，それが表わす音の感じは，慶長九年地震津波を検討するうえで重要なのだが，現段階では未詳といわざるをえない。

## 謝 辞

査読をしてくださった石辺岳男氏と匿名氏から貴重なご意見をいただき，本稿改善のために有益でした。三河地方に名倉という地があることを井上洋氏に教えていただきました。文献の入手で原田智也氏のお世話になりました。編集担当の白石睦弥氏にもお世話になりました。これらの方々に感謝いたします。

対象地震：1605年慶長地震津波

## 文 献

- 五味文彦・本郷和人(編)，2008，現代語訳 吾妻鏡 4 奥州合戦，吉川弘文館，238 pp.
- 塙保己一(編)・太田藤四郎(補)，1958，お湯殿の上の日記(九)，續群書類従・補遺三，續群書類従完成會，550 pp.(1934発行の訂正3版)
- 石橋克彦，2014，1605年慶長九年地震，石橋克彦「南海トラフ巨大地震—歴史・科学・社会」，岩波

- 書店, 52-58.
- 石橋克彦, 2019, 1605年慶長大津波に関する阿波国宍喰の地震・津波記録の検討, 歴史地震, 34号, 115-126.
- 伊東多三郎, 1969, 当代記小考, 日本歴史, 254号, 105-108.
- 弥永貞三・副島種経(校訂), 1985, 義演准后日記第三, 史料纂集, 続群書類従完成会, 278 pp.
- 鎌田純一(校訂), 1973, 舜旧記 第二, 史料纂集, 続群書類従完成会, 272 pp.
- 木村圭司, 2010, 第1編 第2章 愛知の気候, 愛知県史編さん委員会(編)「愛知県史 別編 自然」, 愛知県, 39-78.
- 古代中世地震史料研究会, 2017, [古代・中世]地震・噴火史料データベース( $\beta$ 版), 最終更新日2017年3月15日, <https://historical.seismology.jp/eshiryodb/>
- 国文学研究資料館, 2020, 日本古典籍総合目録データベース, 最終更新日2020年1月31日, <http://base1.nijl.ac.jp/~tkoten/>
- 國書刊行會(編), 1911, 當代記, 「史籍雜纂 第二」, 國書刊行會, 1-214.
- 松岡祐也, 2019, 『当代記』にみる文禄・慶長期の地震・噴火災害, 2019年前近代歴史地震史料研究会講演要旨集, 17-19.
- 武者金吉(編), 1941, 増訂大日本地震史料, 第1巻, 文部省震災豫防評議會, 958 pp.(復刻 日本地震史料, 第1巻, 2012, 明石書店)
- 名倉村・沢田久夫, 1951, 三州名倉 史的變遷篇, 愛知縣北設樂郡名倉村, 223 pp.
- 太向義明, 2011, 『当代記』研究ノート—時間的文言の分析(巻一・二)—, 磯貝正義先生追悼論文集刊行会(編)「戦国大名武田氏と甲斐の中世」, 岩田書院, 233-250.
- 齋木一馬・岩沢愿彦・戸原純一(校訂), 1974, 徳川諸家系譜 第二, 続群書類従完成会, 272 pp.
- 高木昭作, 1989, 当代記, 国史大辞典編集委員会(編)「国史大辞典」, 吉川弘文館, 10巻, 146-147.
- 田中敏貴・小山真人, 2000, 近世初期の自然災害記録媒体としての『当代記』の特性分析, 歴史地震, 16号, 156-162.
- 時慶記研究会(翻刻・校訂), 2008, 時慶記 第三巻, 本願寺出版社, 発売臨川書店, 328 pp.
- 東京大學史料編纂所(編), 1983, 1987, 大日本古記録 言經卿記, 十二, 十三, 岩波書店, 310 pp., 436 pp.
- 東京大学史料編纂所, 2011, 大日本史料総合データベース, <http://wwwap.hi.u-tokyo.ac.jp/ships/shipscontroller>
- 東京帝國大學文科大學史料編纂掛(編), 1901, 大日本史料, 第十二編之二, 東京帝國大學, 1030 pp.(覆刻, 1968, 東京大學出版會)
- 辻善之助(編), 1935, 鹿苑日録, 第4巻, 續群書類従完成會, 414 pp.
- 作手村誌編纂委員会, 1982, 作手村誌, 作手村教育委員会, 1032 pp.
- 宇佐美龍夫・石井寿・今村隆正・武村雅之・松浦律子, 2013, 日本被害地震総覧 599-2012, 東京大学出版会, 722 pp.
- 山本武夫(校訂), 1981, 慶長日件録 第一, 史料纂集, 続群書類従完成会, 236 pp.